



拈花微笑

関口真大



ほほ笑み

〈拈花微笑〉

関口真大

(大正大学教授・文博)

釈尊がある日、靈鷲山で多くの門人のために説法の最中、釈尊は手にしていた一もとの花を投じて大衆に示し、一同を見まわしながら瞬目された。大衆はそれがなにを意味するのか誰もわからなかった。ただひとり、摩訶迦葉だけがそれを見て破顔微笑した。そのとき世尊は申された。「我に正法眼蔵涅槃妙心あり、摩訶迦葉に付嘱しおわんぬ」と。これは禅宗における伝説で、仏仏祖祖面授正法の最初の光景であるとされる。いわゆる教外別伝、以心伝心等の標語より味わい深いと思われる。私は仏典をひもどくときも、仏教について講義をするときにも、まず自分がつねに微笑をふくんだ顔、ほほ笑みの心でそれに当り、人々のほほ笑みをも誘うようなものでありたいと希っている。

二月号



目次

△ねはん会によせて▽雪国の涅槃会……………	谷部忠翁……………(2)
現代とこのころのシリーズ①	
『科学』のこのころ……………	武藤義一……………(6)
私の思う新聞人のこのころ……………	松浦行真……………(10)
現代文明への反省 自然は母である……………	宮林昭彦……………(14)
ブータンへの道②……………	佐藤密雄……………(18)
△読者の声▽ 在家信者の学ぶ法然上人の念仏……………	稲葉好人……………(23)
新刊紹介「公害日本語」ノート 日本語のでたらめさを斬る！……………	(26)
浄土教の流れ△▽みほとけよ、いま一度……………	竹中信常……………(28)
法数術語十二ヶ月(二月の巻)……………	宝田正道……………(32)
書の四季(十一) 写経に見る書の流れ……………	林錦洞……………(36)
念仏ひじり三国志(二十二) 法然上人をめぐる人々……………	寺内大吉……………(38)

表紙 久住 秀雄画

カット 大正大学美術部



△ねはん会によせて▽

雪国の涅槃会

たに べ ちゅう おう
谷 部 忠 翁

(東京都文京区関口大泉寺住職)

「涅槃会」にちなんで、東北の雪国の話をしてみたと思う。東北の雪国では、今が一番寒く、生活も約半年間は雪との戦いである。都会の人々には想像もできないほど大変なことはたしかである。私の子供の頃には、交通機関はいうにおよばず、食料や、暖房の面でも、昨今のようにでなく、まったく不便であった。雪は一月、二月ともなれば毎日のように降りつづき、青空と太陽が顔を出した時の喜びは、また格別である。屋根の上には雪が一メートルも積り、その重さで家がつぶされたりすることもある。そのために屋根から雪

をおろさなければならず、ひと冬の間にこの雪おろしの作業が何回かある。地上の雪でも二メートルから三メートルも積り、家の回りは雪でつつまれ、昼でも電氣をつけて生活をしないと、家の中は真暗である。人との出会いも少なく、話合う機会も限られてしまう。一日が非常に短かく感ずる。

そんな生活の中で、老人達は二月十五日の涅槃会を楽しみに待っている。その当日にはお婆さん達が夜のあけないうちから仕度をして、山のふもとから歩きづらい雪道を、わずかなあかりをたよりに、重箱をさげ、

られた仏様。「報身」は現世を超越した存在としての
仏様、弥陀如来、薬師如来とかの如来がそれである。
「法身」とは宇宙の真理である法そのものを人格化、
仏格化した仏様で、毘盧舎那仏などは法身仏である。

晩年の釈尊の御足は各地で法を説きながら、北へ北
へと向っており、靈鷲山リョウじゆせんの麓にある王舎城から、パー
タリプツタ、さらに、ヴェーサーリーへ、その道順は、
『大般涅槃經』に出ている。なぜ北へ北へと向ってい
るのかというと、その北の方角には釈尊の生まれ故郷
があるからで、そこにはなつかしい、雪をいただくヒ
マラヤが見え、川があり、幼な馴染みの人々が生活し
ている。

ご覧になって釈尊は苦しい息の下から「アーナンダ」とお呼びになり、「阿難よ、純陀は私の最後の供養者になってくれたではないか、責めてはいけない。私が悟りを開いた時に、一番最初だった尼蓮禪河で供養してくれたのは、スジャータであった。今涅槃にのぞんで最後の供養者となってくれたのが純陀である。最初と最後の供養は功德が大きいのだ。純陀よ、お前は私の最後の供養者となってくれた。私はほんとうにお前に感謝をしている」

釈尊のこの言葉を聞いて、アーナンダも純陀も感泣して涙のとどまるところを知らなかった。釈尊は最後の最後まで信者をいたわり愛されたのである。

クシナガラにやっとの思いで着かれた釈尊は、アー

現代とこころのシリーズ

〔一〕

加速度的に展開する現代文明は、一個の人間にとってはあまりにも巨大化してしまった。もはや一人の人間の単位では、現代の世界像は測り知れない。そうした時代にあつて、私達は今、人間のこころのことについて想いを馳せてみたい。そこで今回は、「現代とこころのシリーズ」と題して、色々な道で精一杯生きて来られた方々に、そのこころの歴史を振り返っていただき、また現在の心境を語っていただくことにした。



『科学』のこころ

武^む 藤^{とう} 義^ぎ 一^{いち}

(東京大学教授・工博
東大生産技術研究所長)

科学のこころを考えると、その手掛りとして私がなぜ科学に志したか考をえてみることにした。私が科

学、とくにそのなかでも化学をやりたいと思ったのは小学校の四、五年のときではなかったかと考えられるが、

子爆弾や水素爆弾も出現するに至ったのである。

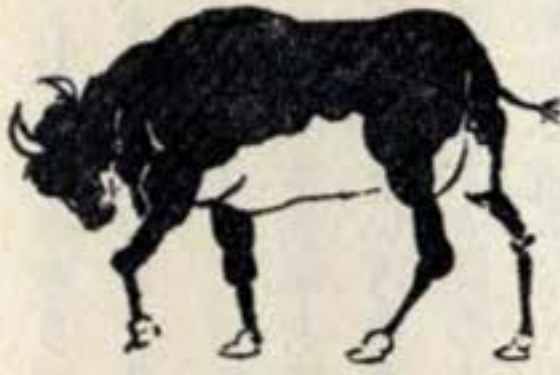


このような物理学が進歩し、物質の構造も分子や原子のことがかなりわかってきたが、生物のからだについては、それが分子の集りであるにも拘らず、そのようなアプローチがなされるようになったのはごく最近のことである。

しかし分子生物学と呼ばれる分野が急激に発展し、最近では生命科学というような学問が多くの人々の注目をひくに至ったのは、人間の生命のからくりや、脳の働きの科学的解明が進み、それが直接に私たち人間そのものにかかわりを持つためである。それらのなかでも重要なことは、私たちは両親から受けついだ遺伝情報の命令に従って、生れてから死ぬまでの生活を送るという、いわば決定論的な生命

の若干を紹介したが、おもてに表れたことは甚しく異なっているが、底流にある思想は大乗仏教と類似しているものが多いことに気付いていたただけであらうか。自然科学は抽象的な方法で捉えた概念の世界を対象としているが、大乗仏教も抽象世界を扱いつつ現実に対処してゆくという考えが基本となっているように思われてならない。但し私は仏教理論については素人であるのであるい

は間違っているかも知れないが。
仏教に限らず東洋思想は象徴主義が多く、たとえば禅の公案とか問答などはきわめて象徴主義的である。同様にして、印度以来の浄土を願生した人のすべての生活を集積したものをきわめて象徴的に示されたものが浄土思想であり、したがって浄土往生の問題は教理と知識だけでは把握できないものであらう。



私の思う新聞人のこころ

——洗面器の栓がこわれている！

まつ　うら　ゆき　まさ
松　浦　行　真

(サンケイ新聞編集委員)

やむなくお引きうけしたものの、「新聞人の心」という主題は、なかなかの難題である。

一般論はここには無理だし、それを煮つめてゆけば、

結局、プレス・コードみたいになって、それをご披露したところで、とても読者の興味をひくとは思われない。楚人冠の全集でもみれば、何か出てくるかもしれない

の人にはていねいにした。そのため多くのおまわりさんから好意をもたれ、私のいない時に何か起きると、わざわざ電話ですぐ知らせてくれたので、ついに一つもニュースを落とさずにすんだ。現場のおまわりさんが通報者なのだから、強いものである。『いい気』にならなかった功德といえよう。

余談はさておき、最近、新聞にたいする雑誌ジャーナリズムの風あたりが、強いようである。当然その裾野には、同質の世論的見方が、かなりあるとみていいだろう。

私が読んでいても、ときどき首をふりたくなるような記事が多いのだから、そういう見方があるのも、無理はないと思う。

<

「反権力の姿勢」とは、ウォーターゲート事件にみせたワシントン・ポスト紙の感覚とは、本質的に異なるものである。

新聞を称して「社会の木鐸」という古くさい言葉があるが、木鐸顔をして、新聞自身が最も安易に社会の時流にのっているのだから、罪はふかい。私はこれを、「新聞人の心」を失ったものと思う。

ここで、一つの寓意的な挿話を紹介しよう。

シベリア鉄道の急行列車に乗りあわせたソ連びいきのA教授が、列車の洗面所に行ったところ、水を貯めるための栓がなかった。そこでA教授は、つぶやいた。

「なんとロシア人は衛生に関心の強い国民なのだろう。栓をはめる金具のまわりはバイキンの巣である。水を貯めれば当然、そのバイキンの浮かぶ水で顔を洗うことになる。それを避けるために、わざと栓をとっぱらったに相違ない」

もう一人、A氏とは立場を異にするB教授も、それからしばらくして、同じ急行列車に乗りあわせた。たまたまB氏は、A氏が栓のない洗面器のことを書いていた文章を読んでいたので、さっそく洗面所に行ってみた。な

るほど、栓がない。そこでB氏はつぶやいた。

「A氏は「ロシア人の衛生観念」をいうが私は違うと思う。栓をして水を貯めて顔を洗うよりも、蛇口を開けっ放しにして両手で水をうけて洗ったほうが、はるかに少ない水量ですむ。これはロシア人の、合理的発想によるものだろう」

私はこの話を、航空工学の専門社で、最近は、日常生活の器具のデザインにみられる国民性の違いに関心をしめしている、佐貫亦男さんにした。すると佐貫さんは、こういつて両説を一笑にふしたものである。

「なアに、ただ栓がこわれてただけですよ。ロシア人は大まかですからねえ」

栓のない洗面器一つをめぐっても、こんなに意見がわかれるのだから、主観、ないし先入観というものは、こわい。

ましてそれが、新聞報道ともなれば、なおさら、影響力は大きい。いましむべきは未熟な主観の押しつけで、私はいつもその自戒を、

——いい気になれる商売。

という一言に、心をおいているのである。



現代文明への反省

—自然は母である—

宮^{みや} 林^{はやし} 昭^{あき} 彦^{ひこ}

(大正大学助教授)

一

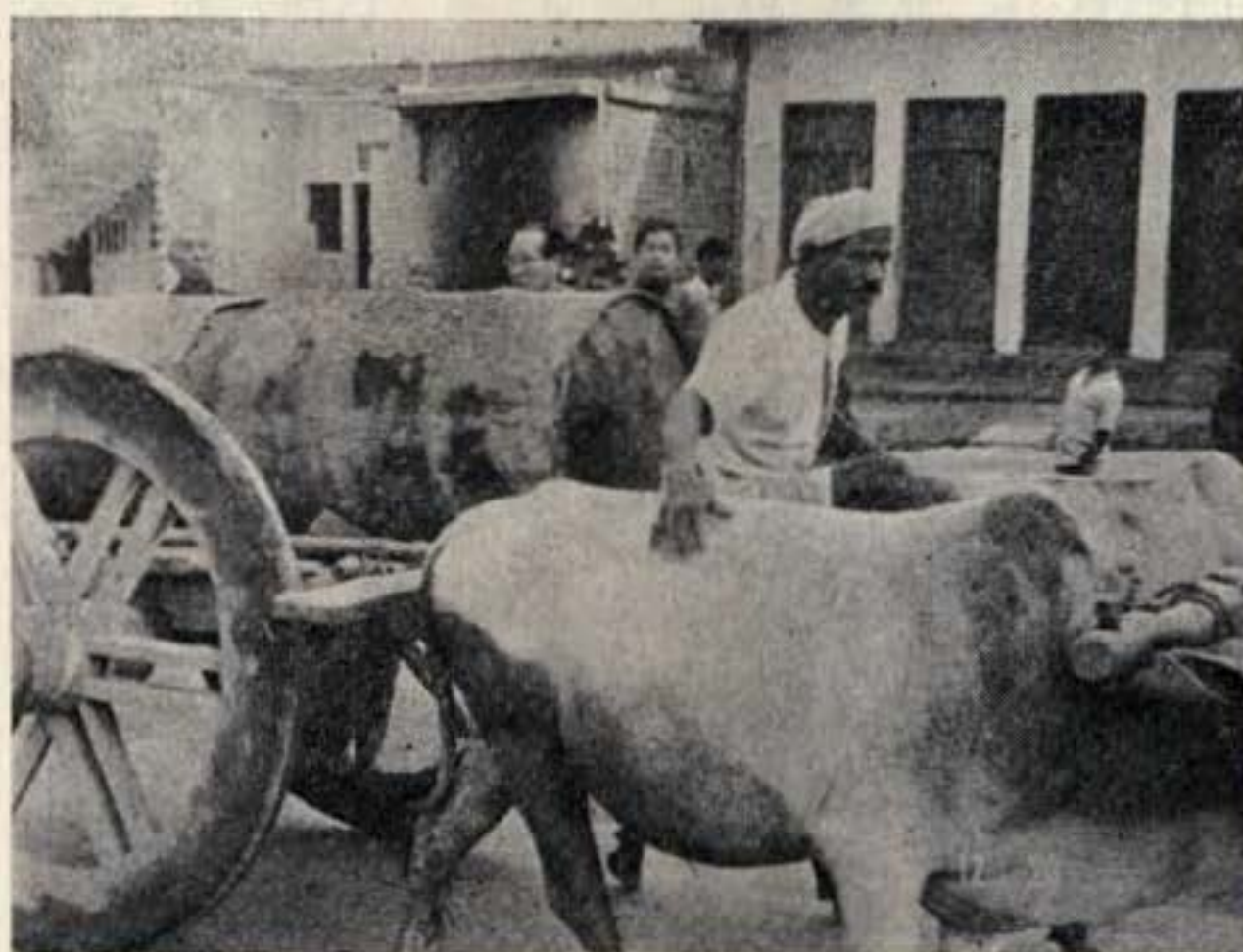
数年前のちょうど今頃の時期に、シルクロードの仏跡を歩いたことがある。パキスタンのラールピンディーから近かくのタキシラまで出かけ、その周辺を散策しているうちに夕暮れになってしまい、道に迷ってしまった。月明かりに右往左往しているとき、拍子よく通りすがりの青年に出くわした。道をたずねると、かなりの道程を心よく道案内してくれた。好意を感謝していくばくのルビーを手に握らせようとすると、かれは払いのけて、ただにっこり微笑しながら手をあげて立ち去ろうとした。

お金を拒否されたので、日本から持っていた扇子を渡しながらサインをしてボールペンも一緒にやると、かれは非常に喜んでおし頂くようにし、いくども頭を下げて、すたすたと裸足で夕闇のなかに消えていった。そのときの月明かりに映った澄んだ青年の眼が印象的でいまだに忘れられない。それからしばらくして、沙漠地帯から都会にもどり、あるとき、ニューデリーで地図をひろげながら市内見物をしていると、「どこえいく?」と聞くから「〇〇本屋へ」というと「案内してやる」といい、家数なら五、六軒の場所をおしえてくれた。「サンキュー」というと、ギョロツとにらみつけて「チップ」と叫んで、チップをもぎとるようにして行った。

旅行中沙漠地帯と都会で味わった、日常茶飯の出来事



(インドの子供達)



ているような社会という定義づけをすることができる。文化という場合は、狭義には宗教・倫理・芸術などの純精神文化と解し、これに対し技術または物質文化をさして文明というようである。これは一応の定義的な説明であって、文明とか文化という言葉は日常において様々のからみ合いのなかで用いられている。

三

近代文明の考え方の基礎を確立したのは、西欧においてルネ・デカルトであるといわれる。その発想は、機械、科学文明の発展により、自然に対する観方を根本的に変えた。平易にいうと、それは、自然にわれわれ人間を苦しめているが、科学の力を発揮すれば、自然は、われわれの召使いのように使えるだろう。機械は自然をわれわれの召使いとして使えるというのである。なるほど、デカルトと予言



ブータンへの道 (二)

佐藤密雄

(鎌倉大仏殿高德院住職・文博)

(三) 静かな国ブータン

門を入った右側に交番めいた建物があつて、その続きの待合所の如き室で入国手続をする。何しろ、外国人の入国を認めたばかりの国である

業員はすべて男性である。半インド的なブンチョリンのバザールは別として、女性がいたのは首都ティンブーの物産館にいた二人の売子だけである。屋外で女性を見ることは少ない。朝の散歩で民家の前に主婦らしいのを見たが、私を見かけると直ちに屋内に入ってしまった。しかし首都では、男性チームと共に少女チームの踊りもあって、回教的な女性閉鎖はないようである。

ブンチョリンの朝は晴れていた。ホテルはガンジスに向って流れるトルサ河の溪谷の、左岸の丘上にある。ホテルからはるかに見降す溪谷であるが、谷というものでなく広々としていて、彼方に対岸の山々のある大平原ともいえる。その中を堤防といった規制を全く受けないトルサ河の流れは、三条になり四条になって、ゆるやかに南を指して蛇行している。

雪を頂いた山は、未だ見えない。この国は二千四百メートルのところにある首都のティンブーに行っても、コスモスと鶏頭の群落があり、山腹に里芋が自生しているが、それが、もうこのブンチョリンから始まっていた。

コスモスの原産地は知らないが、原産地を思わせる程に多い。

音楽のない食堂は調理場の騒ぎもないし、従業員の高声もなく、しーんとしている。ボーイ達は仕事着ともいえる異様な姿で、むしろおどおどしているような、丁寧なサービスである。ホテルの一夜は、全く原始的静寂というほかになく、客同志も低声にしんみり話し合うのみである。もちろんラジオもテレビもなく、自家発電の電灯もクーラーも途切れがちであって、ローソクは食堂にも客室にも必ずあって、マッチは欠くことができない。しかし、料理皿も灰皿もすべて、王室の紋章のある上品な染付陶器であった。

(四) ブータンの服装

二十数年前に、安田徳太郎氏の書に、日本人の祖先はブータン人であるという説が記されてあった。上に触れた「仕事着の和服」スタイルが、このことを根拠づけているようである。この国に入った途端に、歴史を逆行し

て古代日本に來た感じを持つことになる。その第一が彼等の日本風な着物である。見たところ全くの和服である。大臣もホテルのボーイも、この日本風の着物を着して、しかも膝から下を丸出しにする。そこで私は「仕事着の和服」スタイルと名づけたのである。

背広らしいものを着ていたのは一人だけで、ホテルのマネージャーであったが、これはインド人であった。外に異風な者は西域の難民であるか、ネパール人である。着物は和服の袖をやや幅広の筒袖に仕立てである。男はそれを膝までたくしあげており、結び目は異なるが、日本の角帯と同じものを締めている。この膝までたくしあげているところが、仕事着に見えるのである。従って帯の上のふところも、背後も、たくしあげた着物でふくらんでいる。そのふくらみにはいろいろ



■読者の声■

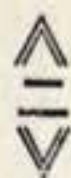
在家信者の学ぶ法然上人の念仏

稲葉好人

法然上人は、滅後の二日前に弟子にすすめられて『一枚起請文』を書いております。法然上人はこの中で、自分の念仏は他の人の勧める念仏と異なっているので、自分の滅後の邪義を防ぐために所存を記しておく、



浄土教の流れ



みほとけよ、いま一度

竹中 信常
たけ なか しん じょう

(大正大学教授・文博)

— 〇 — 〇 —

仏教といえはすぐにお寺を連想する。そして、お寺といえは、たいていのお寺の本堂には「ご本尊さま」が安置されている。わたしの師僧はお檀家の人がお墓参りに来て、まっすぐお墓へ行こうとすると、呼びとめて、

「お寺へ来たら、まづご本尊にご挨拶してからお墓参りをするものだ。一軒の家でも、まづ主人公に挨拶するのと同じだ」

と教えていた。本尊はお寺の主人公である。住職は本尊のご用をうけたまわる、いわば執事か秘書みたいなものである。

本尊にはいろいろある。日蓮宗ではお題目の掛軸を本尊としているようだが、大部分の宗派の本尊は「仏さま」である。仏とは元来「お釈迦さま」である。二十九歳でお城を脱け出て、六年の修行ののちに、三十五歳で悟りを開いて「仏陀」となられたのである。だから、仏教の本来の本尊は「釈迦仏」であるべきであった。ところが、浄土宗のお寺の本尊は「阿弥陀如来」ときめられ

ている。本来、釈迦仏であった本尊が、なぜ阿弥陀仏になったのか。ここから本稿は出発することとする。

—〇二〇—

本月、二月十五日は「ねはんえ」である。釈尊が八十歳でお亡りになった日である。いくら悟りを開いて仏になられても、肉身を持つ以上、釈尊といえども所詮は死なねばならなかったのである。

死んだのち、仏となると思うなよ

死なぬうちこそ、真の妙法

などと白隠禅師はうたっている



法数術語十二ヶ月（二月の巻）

宝田正道

二河白道

善導が『観経疏（散善義）』に説いた、入信から往生に導くための二河の譬え。西方往生を願う旅人（衆生）が、群賊悪獸（六根等の悪見）や水火の二河（煩惱）に阻まれるが、東岸（釈迦）と西岸（弥陀）から呼ぶ声に励まされて、中央の白道（正信）一すじにまっしぐら進み、極楽浄土に到達する経過を描く。「二河譬」とも「二つの河の道」ともいう。

二求

われわれ凡夫のもっている二つの欲求、すなわち、楽

を得ようとする心（得求）と長生きをしたいと思う心（命求）の二種。

二慳

財慳と法慳の二つ。財慳は財を惜しんで他に施さないこと、法慳は法を惜しんで教えを他に伝えないこと。

二語

二枚舌のこと。また両舌ともいう。前と後とっていいることがちがうこと。

二に 光こう

仏身から放たれる二種の光明。一は眼で見ることで
きる色光または身光、二は仏の智慧から発して衆生を擁
護したまう心光または智慧光。また、諸仏の身体から発
する常光と、特殊の衆生に対して神力をもって放つ神通
光の二つ。

二に 更こう

今日の午後九時、または九時から十一時頃までの時刻。

二に 蔽ごん

智慧莊嚴と福德莊嚴。前者は智慧を磨いて身の莊嚴と
すること、後者は円満な福德を積んで身の莊嚴とするこ
と。

二に 始し

小乗と大乘の始まり。釈尊が鹿野苑を『阿含経』を説
いたのを小乗の始まり、後に『華嚴経』を説いたのを大

乗の始まりとする。

二に 字じ

僧の実名の字数は二字と定められているが、師に弟子
入りするとき、実名二字を書いて呈する習慣から、入門
して弟子となることを「二字をたてまつる」という。

二に 食じき

比丘の生活の中には、正しい乞食によって生命を保つ
正命食と、よこしまな方法によって生活の糧を得る邪命
食とある。これらを普通二食というが、また、法喜食
(法を聞いて喜ぶ)と禅悦食(禅定に入って静けさの喜びにひ
たる)の二種をさす場合もある。

二に 修しゆ

専雑二修のこと。専修はもっぱら阿弥陀仏に帰依する
行、雑種はその他の諸行を修すること。

二に 種廻向しゆえこう

往相廻向と還相廻向の二つ。前者はおのれの積んだ功

釈迦・弥陀二尊をさす。浄土宗では二尊一教を主張する立場上、本尊は弥陀一仏とするが、西山派では二尊二教と説く。

二に尊せん

二に夜や

釈尊が悟りを開いた夜と入滅した夜のこと。

二に益やく

二に飯はん

現・当の二益。現益は現世で、当益は未来世で、それぞれ得る利益。

|| 書の四季 ||

有情世間難免春屬者為佳親友煩惱
者為佳良醫无救護者為佳叔護无歸依者
為佳歸依无明有情為佳法燬如是菩薩為
諸有情作所依止善療衆病如藥樹王如有
樹王名為善見根莖枝葉及諸花果色香味
觸時能療病此諸菩薩亦復如是從初發心

＜和銅經＞

写経に見る書の流れ

念佛ひじり三國志 (三)

—法然をめぐる人々—

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



木曾の兵士たちは、じきに恐ろしい素顔を都人の前にさらけ出したのである。

リ京ニ入ル（義仲ハ北、行家ハ南）云々。晩頭、左少弁光長来リ語リテ云ウ。義仲行家等ヲ蓮華天院御所ニ召シ、追討ノ事、仰セ遣ワサル。大理、殿上ノ縁ニテ之ヲ仰セラル。カノ兩人、地に跪キテ之ヲ承ク。御所ノ為ニ依ルナリ。参入ノ間、兩人相並ビアエテ前後セズ。争權ノ意趣、之ヲ以テ知ルベシ。兩人退出ノ間、頭弁兼光京中ノ狼藉ヲ停止スベキノ由、仰セラルト云々。

九条兼実ハ日記「玉葉」でこう書いている。久しぶりに洛中にたなびいた源家の白旗が、入京早々に掠奪暴行を開始したことがこの文章でわかるはずだ。

狼藉の停止を命じながら、一方で平家追討の令旨を与えてしまった

と、夫人の身をいたわった。

「ではどうなされますか」

「どうもこうもない。この人を守ってあげるだけだ」

「守る……とおっしゃると」

「斬るというなら私が先に斬られよう。連れてゆくと言
うなら、この法然を斬ってからにしてもらおう」

法然の覚悟が、信空にははっきりとわかった。でも暴
挙だと思った。資盛夫人は格別に義理のある女ではな
い。

る同母系の従姉にあたる資盛夫人こそふさわしい、と筆者は断定したい。なぜならこの女人こそ勢観房源智の生みの母親だったからである。

おそらく実父基家のもとで身二つになったこの母子は、一緒に暮すことができなかったのではあるまいか。当時十七歳だった資盛夫人は、生み落したあと宮中に出仕するか、然るべき公卿へ再婚したと考えられる。臉の母との対面を、あの建暦二年正月のエピソードに筆者は置きかえたのである。

母子として名乗り合えない不幸な人生、法然は源智に「韋提希夫人よ」とほのめかしたとみると、この伝説に豊かな情愛がこめられてくる。

「待ちなさい」

椎の樹かげから声が流れた。

もう一人の目撃者がいたのだ。

鈍色の僧衣をまとうている。しかし頭は蓬髪だった。僧とも俗ともつかない。

「何だ」

「あなたはこの女を兵庫と呼んだ。知り合いなのだ」

「以前、ちょっとだけ縁があった」

「ちょっとだけの縁であっても責任を取らねばならぬ」
どこか押しつけがましい。

二 編集後記 二

○「きさらぎ」の月を迎えて、寒さは一時にもまして厳しい。元気に遊ぶ子供たちの頬も赤くはち切れんばかりである。しかし、この激しい冷たさの中にも、もう春の訪れの予感がある。見上れば、さしかわす梅の小枝に、白や赤の小花がさわおかにほころんでいる。来るべき春に向けて私達のころも潔よくすがすがしくありたい。

梅が香に追ひ戻さるる寒さかな 芭蕉

梅咲くや門迹を待つ青畳 一茶

○「ころ」といえば、現代社会の物質文明の中で、人間のころの不毛が叫ばれて久しい。肉親家族の間における不和、会社の上役と下役にかわされる不信感、先生と生徒のすれちがい——どれをとっても騒がしい時代のもたらすものにはちがいない。しかしながら、新聞の三面記事をにぎわすようなでき事は、逆にいつの世においても変らぬことでもあるかもしれない。いずれ

にしても、人間のもつ複雑な思惑が、さまざまな個人のころの様相に反映して、人それぞれの雑多な姿を現わしているといつてよい。そのようなことから、本誌ではこれから「現代ところのシリーズ」と銘打って、各界でご活躍の方々に、過ぎ来し方の心持ちや今の考えなどを平明に語り綴っていただくことにした。大いにご期待願いたい。

○ところで世間の動向は相変らず慌ただしいものである。巷間では悪性の風邪も流行している。読者諸賢も健康にはくれぐれも留意していただきたい。何をするにも身の健全が第一である。ましてや、ころの健全さを心掛けるのも、健康な肉体においてこそである。無理をせず、余裕をもった生き方こそ、秒単位で進行して行く現代生活への妥当な処方箋といえよう。明るい社会生活を営むためには、みずからのころの管理が先決である。そしてそのころを正しく清らかに育むためには健全な身体が必要である。

「浄土」購読規定

会費一カ年金二、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 二月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十一年一月二十五日 印刷

昭和五十一年二月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇二 振替東京八二一八七番

「浄土」教化トラクト

『ひがん会』春季号

新書判・表紙共 12ページ

定価 20円 (200部以上 18円)

『和文浄土三部経』

附 法然上人撰 「三部経釈」 抄述

新装判近日刷了 定価 2,500 円

『法然上人と浄土宗』

B6判 96頁 定価180円 (〒70円)

(200部以上 単価160円 送料実費)

現代に生きる法然上人のみ教えを、平易に解説。併せて念仏信者としてあるべき道を示したトラクト。施本等に広くご利用下さい。

〒102 東京都千代田区飯田橋 1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (03) 262-5944 番